

Title	言語教育シンポジウム：英文解釈法再考：日本人にふさわしい英語学習法を考える
Sub Title	Keio University symposium on language teaching: reevaluating how to interpret English constructions, phrases, and passages
Author	桃生, 朋子(Mono, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学グローバルCOEプログラム人文科学分野論理と感性の先端的教育研究拠点
Publication year	2010
Jtitle	活動報告書 Vol.4, (2010.) ,p.24- 24
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	第2章：シンポジウム等の活動報告
Genre	Research Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO12002002-20110300-0024

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

言語教育シンポジウム：英文解釈法再考：日本人にふさわしい英語学習法を考える

Keio University Symposium on Language Teaching: Reevaluating How to Interpret English Constructions, Phrases, and Passages

3

開催日 2010年7月11日

企画 大津由紀雄（言語と認知班）

講演者 江利川春雄（和歌山大学）、斎藤兆史（東京大学）、大津由紀雄（言語と認知班）

2010年7月11日に慶應義塾大学言語教育シンポジウム「英文解釈法再考～日本人にふさわしい英語学習法を考える～」が開催された。英語／言語教育シンポジウムは今回で8回目を迎えるが、今回のシンポジウムでは、各登壇者独自の視点で英文解釈法を再評価し、今日の日本の英語教育の状況下で、それを積極的に利用することの意義について議論がなされた。

第一部では江利川春雄教授（和歌山大学）、斎藤兆史教授（東京大学）、大津由紀雄教授（言語と認知班）による講演があり、その後安井稔教授（東北大学名誉教授）より各講演へのコメントをもらった。そして第二部では、鼎談および全体討論が行われた。

江利川教授の講演（演題：英文解釈法の歴史的意義と現代的課題）では、まず日本の英語教育における英語力の低下や英語嫌いの増加などの悲惨な現状が実証的に示された。江利川氏によれば、それらを生む原因はオーラル・コミュニケーション重視の教育であり、さらにそのオーラル重視を生む原因は、ESLとEFLの混同、そしてBICSとCALPの混同にある、とする。そして、日本のEFL環境にふさわしい学習法として、明治期に体系化された英文解釈法があることが提案された。ただ、英文解釈法と一口にいても、その側面は英文和訳から直読直解まで多岐に渡っている。そしてその裏には、いくつか危険性が潜む場合がある。例えば、英文和訳は英語力の鍛錬のみならず、日本語力や思考力の鍛錬にとっても有意義である一方、教師にとって比較的楽な英文和訳中心の一斉授業を行ってばかりでは英語力に偏りが生じる、という危険性がある。学習者の熟達度に応じて教授項目や教授方法を選定し、授業自体に工夫を凝らすことを疎かにしてはいけないということも、重要な点として指摘された。

斎藤教授の講演（演題：外国語学習法としての英文解釈法のすばらしさ）では、実際の授業で英文解釈法のどの側面をどのように生かすのかが、教材を用いながら解説された。講演の中で繰り返し述べられたことの一つに、“英語教師は generalist であるべき”という言葉があった。その意図するところは、英文解釈法を利用すると言っても、単なる解説主義にはならず、音声記号を含む発音や会話を盛り込んだバランスのとれた教授項目を設定し、学習者のレベルに応じた授業をする必要がある、ということである。

大津教授の講演（演題：認知科学からみた英文解釈法）では、まず英語教育の現状について、オーラル・コミュニケーション重視の教育が生み出す諸問題、そして英文解釈法に対する誤った評価が指摘された。また英文を解釈するには、文構造、文章構造、情報構造、発話状況、さらには聞き手の人生に対する考えを複合的に分析する、という抽象的で複雑な認知的営みが必要であることが、演歌の歌詞等を用いながら説明された。そしてこのことから、英文解釈法を利用することは人間教育の実践そのものであることを主張した。英文解釈法を利用することのもう一つの利点として、母語を利用した“ことばへの気づき”の育成が実現され、さらには“ことばへの気づき”を介した母語、そして外国語の効果的運用が循環的に実現することが

挙げられた。

以上の講演を受け、安井教授は“英語を英語で教える”ことの限界を具体例を用いながら指摘した。また、母語である日本語を“踏み台”として利用することで、英語学習において日本語と英語を対等に扱うことが可能である、とのコメントもあった。

第二部の鼎談は、事前にフロアから集めた質問に登壇者が答える形で進められ、幅広い議論が行われた。その後の全体討論では多くの質問やコメントが寄せられ、大盛況のうちにシンポジウムは終了した。

言うまでもなく、単に英文解釈法を採用していれば英語教育における諸問題が直ちに解決する、ということを講演者が主張しているのではない。大切なことは、英語教育に関わる全ての者が英語教育の目的を見直し、その目的に合った学習法を、学習指導要領に踊らされることなく検討することである。あくまでそこから生じる行動の一つとして「英文解釈法の再考」がある、と私は考える。

今回のシンポジウムには定員を大幅に超える申し込みがあり、数多くの方々参加をお断りせざるを得ない状況であった。当日配布したハンドブックおよび資料は、大津研究室ウェブサイト (<http://www.otsu.icl.keio.ac.jp/>)、またはブログ (<http://oyukio.blogspot.com/>) に掲載されているので、是非参照されたい。

(桃生朋子)

The Keio University Symposium on Language Teaching was held on July 11, 2010. It mainly focused on reevaluating how to interpret English constructions, phrases, and passages as a means for improving techniques for English instruction in a Japanese EFL environment. First, Haruo Erikawa (Wakayama University), Yoshifumi Saito (The University of Tokyo), and Yukio Otsu (Keio University) evaluated how to interpret English from a different perspective. Then, Minoru Yasui (Tohoku University) provided comments on these lectures. These speakers shared the idea that English learning methods which put weight on the ability of oral communication have harmful effects and we should adopt other ways which are suitable for an EFL environment.

